

現代韓國小說選

# 恐怖の季節・アリラン

現代韓国小説選

尹正奎 朴湫禧 徐基源

李範宣 李丞玉 訳

同成社版

## 恐怖の季節・アリラン——現代韓国小説選——

李 丞 玉 (イースングォク)

1930年生。東京台東区竜泉寺町に少年期を過ごす。

1956年 神奈川朝鮮中高級学校教員。1960年以降雑誌編集に従事。現在「海峡」同人。

〔主な訳書〕

ルイス・ハラツプ「芸術とはどういうものか」(英文)

(三一書房 1954年共訳)

李箕永「長篇小説・流浪の追憶」(朝鮮青年社 1965年)

現代南朝鮮小説選「歲月」(新興書房 1967年)

現代韓国小説選「帝国幽霊・黄狗の悲鳴」(同成社 1978年)

訳者トノ協定ニヨリ検印ヲ省略

¥ 1500

1978年11月20日第1版発行

訳 者 李 丞 玉

発行者 岡 崎 元 哉

印刷者 高 野 義 夫

発行所 東京都千代田区富士見 同 成 社  
2〜6 雄 山 閣 ビル 内

TEL 03-880-3681 振替東京1-156415番

© Printed in Japan The Dohsei Publishing Co.,

0397-064078-5256

## まえがき

さきに刊行した「現代韓国小説選」第一集の「帝国幽霊・黄狗の悲鳴」には七編の短篇小説を収めたが、望外の好評を博した。これはひとえに、原作者たちの作品内容によるものであることはいうまでもない。

この第二集の編訳にあたっては、短篇のみでなく中篇を加えることにした。「鉄を食べて生きる人々」がそれである。また作品選択を一九七〇年代にこだわらず、六〇年代にもさかのぼってみた。いずれも現在に生きつづける現実告発の作品である。また第一集と同じくこの第二集も、現代韓国文学の体系あるいは代表作といわれるものを紹介するとか、韓国文学を系統的にみられるようにとの意図をもって編んだものではない。

その意味ではこれまでに出版された「韓国文学全集」あるいは「朝鮮文学選」と銘うったたぐいのものが、系統的に朝鮮の文学を整理したうえで編まれているかという点、決してそうで

はない。

いずれにせよ将来は、「韓国の文学」は統一朝鮮の観点に立った、朝鮮南北の文学作品を網羅したうえに再検討されねばならないであろう。一つの民族の文学としてである。そのようにみるとき、「現代韓国小説選」という題名のつけ方も、朝鮮の南半分における地域の文学のほんの一部分を示す便宜的なものにすぎない。

このたびの編訳にあたっても原作者の諒承は得ていない。一日も早くこの非正常を正したい思い切なるものがある。それは朝鮮の南北交流の正常化、または統一の実現を待つしかないのかもしれぬ。

各作品の解説には畏友、清沢治君の手をわずらわせた。日本人の立場からはこのように読みとれたという、作品の文学的・社会的背景をふまえての解説である。作品理解のうえで大いに参考になるものと信ずる。

一九七八年 初秋

李 丞 玉

## 目次

まえがき

恐怖の季節……………尹正奎 ユンジョンキム 七

兄弟……………朴洵禧 パクジュンフイ 三

アリラン……………徐基源 ソキョン 九

鉄を食べて生きる人々……………李範宣 イガンソン 二七

解説……………清沢治 三七



恐怖の季節・アリラン——現代韓国小説選——



恐怖の季節

尹<sup>ムン</sup>  
正<sup>ジ</sup>  
奎<sup>オン</sup>  
奎<sup>カ</sup>  
奎<sup>ム</sup>

尹正奎 一九三七年生まれ。出生地は日本の名古屋市という。これといった学歴はなく独学。一九五七年に、短篇「畜生図」が『現代文学』誌に推薦作となり、その後は放送局、新聞社などに勤めるかたわら創作に専心、数多くの作品を発表している。

彼の作品は政治・社会・経済的な不条理の風刺、農民や都市勤労者がかかえる苦悩などを描いていたいへんに幅ひろい。

日本に紹介されている作品には一九七一年に発表の「恨水伝」（『現代朝鮮文学選1』創土社版所収）および一九六九年発表の「汚辱の河」（『人間として』九号、筑摩書房）などがある。

「恐怖の季節」は『新東亜』誌一九七三年十二月号に掲載された作品。

人生を不幸におとしいるものには、理屈ではとうてい割りきれないさまざまのものが、この世の中にはころがっていることを知らぬ者はおるまい。たとえば、歩いていて、一步踏み誤まつたその一步が不幸の原因となることもあれば、高いかねを払って食べた一皿のさしみが、不幸の根拠をもたらしこともある。そうかと思えば、冗談でしゃべった一言、なにげなくつぶやいた不平の一言が、監獄行きにつながることもある。いうなれば、人生のもろもろは不幸の影を背負っているものと言ってさしつかえなからう。要するに、手放しに喜んでいいなんぞということは何ひとつなく、あるのは悲しい出来事ばかりといっても、それほど、まちがった話ではないのである。

だから、不幸な話とか悲しい出来事、あるいは、悲惨なその何かといったもの——こんなものは、もはやわれわれ市民にとっては食傷しているといってもよい。したがって、興味津々たる話がこれといってあろうはずがないというのも、これまた当然のことといえよう。

ところで、われらが主人公である金基洙<sup>キムキス</sup>がなめている苦しみをうかがいみるに、不幸に見舞われたとか、悲惨な様相を呈しているとかいったものではなく、そんなものをおりこした恐怖の

霧がかかっている、そういったものが数あるなかで、若干の興味をおぼえさせずにおかない。

誰もが知つてのとおり、不幸というものは誰にでもあるものであり、したがって少しぐらいの不幸なんてものは氣にもされないことがある。いうなれば、人間なんぞというものは、性行為をしながらも不幸を意識するようにできているのであるから、不幸なんぞは、じつはたいしたことではないのである。

しかし、人間をとりまいてる霧が、恐怖におののく叫びであるとしたら、それは断じて、氣にもかけず放つておいてしまうというわけにはいかない。考えようによつては、不幸というものは、人間の氣持に響きと憤怒の炎を燃えたたせて、ある、芸術的な美をたぎりたたせる場合もある。たとえば、人類の歴史に永く伝わっている芸術なんぞは、この不幸から生じているものと言つてもよい。だから、不幸は芸術の母ともなるはずのものであった。

だが恐怖の霧の中には、そのようなきざしがない。一言でいうと、恐怖というものは、人間を動物に退化させるタイムマシンのようなものである。つまり金基洙の生きている人生が、その不幸のきざしというよりは、恐怖の霧に深く閉ざされていて、彼に動物的な退化を強いている、そういったものであつて、少しばかり興味をひくのである。しかしこの興味は、われわれ愚かな市民が期待してやまない芸術的な興味とは、なんら関係がないことをあらかじめ理解しておくことも、理解してはいないよりははるかに賢明であらうことをいまいちど述べておきたい。なぜかと言ふと、金基洙の話は、いうなれば彼の個人的ないきさつを述べたものというよりも、われ

われ愚かな市民すべてにかかわる話であるといえないこともないからである。

金基洙は、三十年間を鉄道の機関士として働き、四ヵ月後には停年退職をすることになった金某氏の息子であった。基洙の上には二人の姉がいるが、すでに嫁いで、サラリーマンの妻として幸せな不幸をおくっていた。そして彼の下にも二人の弟がいて、やがて金機関士が停年退職をすれば、この弟の扶養責任はしぜんと基洙の肩にのしかかってくるほかなかった。ところで、わかつてのとおり、鉄道機関士に蓄えがあるはずはなく、したがって基洙の扶養責任は、せいっぱい働くことによって果たすしか途はないのであった。

だからこのような境遇をみるだけでも、金基洙が不幸な青年であることは、いとたやすく理解できるであらう。

だが、といって、金基洙がこのことに気を落とすとか、やがてのしかかってくる扶養責任の重量の重みに気負けするような、そんな弱虫ではなかった。不幸の影につきまとわれながらも、適当に勇氣ある行動もとれば、二十六歳の青年にしばしばありがちな放蕩もたまには味わうのである。そして、正しいと思えば、はた目かまわず突進することも心得ていた。要するに金基洙は、ほかでもなく、秀才にもなれない平凡な青年であった。

金基洙は国民学校、中学校、高等学校を文字どおり無難に卒え、大学も四年間で卒業した。在学中には授業料のことで苦勞もし、教科書や学用品をそのときどきに買えなくて、悲しい思いをしたこともしばしばあった。しかし卒業証書を手に握って、ああ、やっと卒業できたんだな、と

いう思いが、いちばん最初に頭をかすめよぎった。

金基洙は卒業と同時に予備将校訓練団の陸軍少尉として入隊し二年をおくった。この二年間の歳月については、感ずるところ大なるものがあつた。短い年月ではあつたが、実際の年月より十倍も長いように思われ、それだけに喜怒哀楽の断層は幾重にも積み重ねられた。

そして彼が軍服を脱いだとき、まず思つたことは、自由に対する信頼のようなものであつた。

基洙は、法律が定めた義務はすべて終えたのであつた。したがって、法律が許す自由を享有して暮らす権利があつた。

この自由というものは、頌歌にも似て高らかに、そしてビールの泡に劣らずふくらんでゆくのであつた。

金基洙は、そのように高らかにふくらみゆく自由への信頼を胸に秘めて、社会に第一歩を踏みだした。

基洙が社会に足を踏みだす第一歩の手続きは、もちろん就職試験からであつた。ちようど韓国財閥傘下の十二の企業体で新入社員を募集する試験があつた。

彼はぶじに合格し、十二企業体のなかでも最も規模の大きい会社である大王繊維に辞令をもらった。

これからは、基洙みずからが、これまでに糾弾してきた腐敗した社会、不正がなくならずにいる堕落しきつた社会の一員として、けわしい世間の波をかきわけてゆかねばならなくなつたので

あった。彼は、腐敗や不正に負けまいという強い覚悟を抱いていた。そして、不正な社会の一員にとどまることなく、社会を改善する働き手として、前向きに歩もうとの自信に満ちみちていた。

しかし考えてみるに、金基洙のこのような姿勢からしてが、はや、世間とは歩調の合わないものであった。講壇で通用する真理とか学問とか正義とかいうものとはなんらの関係もなしに、社会の独得の秩序で腐っていきながら太ってゆく社会に踏みこみながら、講壇的な真理の追求という感覚をもって飛びこむというそれ自体が、社会からみれば、笑止このうえないことである。したがって金基洙と社会のあいだには、大なり小なりの衝突があつてしかるべきであつた。そしてその衝突は、予想外に早く、いやあまりにも早くやつてきたのであつた。

入社してようやく三日目になる日の午後三時ごろ、金基洙は、トイレへ行つての帰りに、たまたま宛名のない封筒に入つた一通の書類を拾つた。

そのとき廊下には、誰ひとりいなかった。そのうえ封筒には宛先も書いていない。金基洙は、どこかへ送ろうとしていた手紙を、宛先も書くまえに落としたのだな、と頭にひらめかせ、これじゃ、落とし主を探すにも探しようがないと思つた。封筒の中味を見ないでは、落とし主がわからないのだ。それに好奇心もなくなつた。

基洙は、封もまだしていいない封筒の中味を取り出した。封筒の中には一通の書類が入つていた。

まっさきに目についたのは、書類に押してある大王繊維社長の職印であった。受信人は韓国財閥の総帥である朴会長になっていた。

基洙は、社長が会長に宛てた書類を、好奇心のあまりに読んでしまった。思わずあいた口がふさがらなかった。

書類の内容は脱税に関する報告書であった。

大王繊維の月間生産量を一〇〇として、税務当局に申告した生産量は七〇にしたということと、三〇に対する物品税の脱税額が五百万ウォンだという事実を明かしていた。これからみると、韓国財閥の基幹業体の大王繊維が、月に五百万ウォンの脱税をしているとの報告書であった。

これはもちろん、大王繊維の金社長が朴会長の歡心をかおうとするためのものか、でなければ、金社長と朴会長の歩調がびつたりと合っているためにできる不正なのであろう。

基洙は、しばらく、あいた口がふさがらずにいた。あまりに驚くべきことであった。いや、驚くべきというよりは、騙されているという思いがもつと強かった。彼は、韓国財閥の十二の企業体が、みんなこのような欺瞞によって積み上げられたビルディングではないかと思ひこんでしまうところだった。それほどに衝撃が大きかった。それでいながら、少しは理解がゆかぬでもなかった。

ふつうのまともな人間なら、税金を納めるのを喜ぶ者はいない。やむなく、しぶしぶと納める